



浅野氏広島城入城400年記念事業 広島市立中央図書館 企画展

浅野家と広島藩

～初代長政から最後の藩主長勲まで～

展示パネル（浅野家歴代藩主紹介）

開催期間：令和元年9月16日(月・祝)～11月17日(日)

会場：広島市立中央図書館 2階 展示ホール

主催：広島市、広島市立中央図書館

初代 浅野長政 (初名・長吉)

天文 16 年 (1547 年) ~ 慶長 16 年 (1611 年)

浅野氏の祖、浅野長政は天文 16 年(1547 年)に尾張国(現愛知県)で生まれ、織田信長に弓衆として仕えた浅野又右衛門尉長勝の養女・末津姫と結婚し、浅野家に入った。末津姫の姉・寧々が豊臣秀吉の正室(北政所)となったことから、長政は若いころから秀吉に仕えた。天正元年(1573 年)に 120 石を与えられて以来、秀吉の出世とともに、長政の地位も上がり、秀吉の晩年には五奉行 (豊臣政権下の執政職) となった。

長政は豊臣政権下において、武功だけでなく、太閤検地等内政面においても手腕を発揮し、秀吉の全国統一に向けて、徳川家康や伊達政宗との交渉や説得にも大きな役割を果たした。

よしなが 2代 浅野幸長

天正4年（1576年）～慶長18年（1613年）

幼いころから秀吉に仕え、天正18年（1590年）、父・長政とともに秀吉の小田原北条氏攻めに参戦、軍功を上げ、文禄2年（1593年）には長政とともに甲斐一国22万5千石の大名となった。

慶長3年（1598年）に秀吉が、翌年に前田利家が没すると、幸長や加藤清正、福島正則ら武断派（豊臣七将）と、石田三成ら文治派との対立が決定的となった。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いで、幸長は徳川方の先鋒として戦果をあげ、この功により紀伊国（現 和歌山県）37万6千石余に加増転封された。

和流砲術の主要流派の一つ、稲富流いなとみ（いなどめ）りゅうの祖、稲富一夢いちむから砲術を学び、「天下一」と称されるほど武芸に秀で、徳川秀忠にその術を指南したとされる。

一方で学を好み、慶長11年（1606年）秋、日本朱子学の開祖とされる藤原惺窩せいかを招き、儒学の教えを請うている。

ながあきら

3代 浅野長晟

天正 14 年（1586 年）～寛永 9 年（1632 年）

広島藩主在位期間：元和 5 年（1619 年）～寛永 9 年（1632 年）

長晟は、長政の次男として天正 14 年（1586 年）、近江国坂本（現 滋賀県大津市）で生まれた。文禄 3 年（1594 年）、8 歳の頃から秀吉に仕えた。秀吉の死後、慶長 15 年（1610 年）、長晟は徳川秀忠から備中国足守あしもり（現 岡山県）2 万 4 千石が与えられ、北政所きたのまんどころの守護役を勤め、京都に住んだ。この時、長政は長晟への手紙で、領国経営の心得を事細かく伝えている。

慶長 18 年（1613 年）に兄・幸長よしながが嫡子の無いまま死去したため、28 歳で遺領和歌山 37 万 6 千石を継いだ。慶長 19 年（1614 年）と同 20 年の大坂の陣では徳川方として功を挙げ、元和元年（1615 年）には家康の三女・振姫ふりひめと婚姻を結び、徳川家とのつながりを強化する。そして元和 5 年（1619 年）、広島城無断修築の罪で改易となった福島正則に代わり、広島藩 42 万 6 千石に加増転封となり、以後約 250 年と続く藩政の基礎を固めた。

みつあきら

4代 (2代藩主) 浅野光晟

元和3年(1617年)～元禄6年(1693年)

広島藩主在位期間：寛永9年(1632年)～寛文12年(1672年)

和歌山城内に生まれる。母は徳川家康の三女振姫ふりひめで、光晟は家康の外孫であり、3代将軍家光の従兄弟にあたる。

寛永4年(1627年)江戸城にて元服し、将軍家光から松平へんきの称号と偏諱を受けた。偏諱とは、実名の一文字目に将軍の名前の一字を受けることで、以後代々の例となった。

父・長晟の死を受け、寛永9年(1632年)にわずか15歳で襲封した。その際、庶兄しよけい(妾腹の兄)長治ながはるに5万石を分知し、三次支藩を立てることを幕府から許されている。

光晟の治世は約40年と長く、西国街道ほか道路の整備や、職制・税制を整えるなど、藩政の基盤を安定させた。

寛文12年(1672年)4月に55歳で隠居したが、翌年、5代藩主 綱晟ほうそうが疱瘡(天然痘)で死去したため、15歳で襲封した孫・綱長の後見を10年務めた。

能に長じており、隠居後の貞享2年(1685年)将軍綱吉の所望で江戸城二の丸に参上し、能を演じたという。

5代 (3代藩主) 浅野綱晟

寛永14年(1637年)～寛文13年(1673年)

広島藩主在位期間：寛文12年(1672年)～寛文13年(1673年)

江戸で生まれた。母・自昌院(満姫)は、加賀藩3代藩主前田利常の娘で、2代将軍徳川秀忠の孫にあたる。将軍家光は、綱晟の誕生を大変喜んだといわれ、幼年期、正月に母・自昌院に連れられ登城した際には、家光から贈り物を貰うなど、浅野家の御曹司として将来を期待された。承応2年(1653年)4代将軍家綱の前で元服。偏諱を賜り綱晟と名乗った。

明暦元年(1655年)、広島に初めて入国して以来、父・光晟と交代で在国し、政務を執った。広島に帰国中は、安芸郡新山村(にいやま)(現在の牛田日通寺付近)にある、山荘「日新館」を自らの勉強・修養の場所として愛用していた。

寛文12年(1672年)4月、父・光晟の隠居を受け、35歳で襲封した。英才の風があり藩中の信望も篤く、次代の太守として期待を寄せられていたが、その年の暮れ、疱瘡(天然痘)にかかり、寛文13年(1673年)1月に37歳の若さで病没した。藩主在位期間はわずか9か月であった。

6代 (4代藩主) 浅野綱長

万治2年(1659年)～宝永5年(1708年)

広島藩主在位期間：寛文13年(1673年)～宝永5年(1708年)

生母・逸姫が綱長の出産後まもなく他界したため、祖母である白昌院により養育された。寛文13年(1673年)14歳のとき、父・綱晟の死去にともない襲封、祖父・光晟の庇護のもと成人した。

その治世は5代将軍綱吉つなよしの時代とほぼ同じで、文治政治の展開により学問・文化が発展し華美な元禄文化が開花する一方で、年貢の収納がほぼ頭打ちとなり、藩財政にはかげりが見えはじめていた。

そのため綱長も、元禄8年(1695年)に厳しい儉約令を出したほか、宝永元年(1704年)に5種類の銀札を発行するなど藩経済の立て直しを図った。また、文教政策にも力を入れ、自身も学問を好んだ。

なお、その治世中には、有名な赤穂事件が起きており、綱長は浅野本家として、その対応を迫られた。事件の知らせを受け、直ちに赤穂屋敷に家臣を派遣して警戒にあたらせる一方、赤穂城の大石内蔵助くらのすけに使者を送り、騒動を起こさないよう注意するなど、赤穂城引き渡しに際し無血開城に万全を期したほか、長矩ながのりの弟・浅野大学を広島藩で預かるなど事件の收拾に力を尽くした。

また、綱長は歴代藩主の中でも書画に優れ、特に丹青の技に長じていたといわれる。

7代 (5代藩主) 浅野吉長

天和元年（1681年）～宝暦2年（1752年）

広島藩主在位期間：宝永5年(1708年)～宝暦2年（1752年）

27歳で藩主に就任した。浅野家中興の祖であり、その治世は歴代藩主の中で最長の44年に及ぶ。就任直後から職制や財政の改革を自ら主導し、幕府の儒官から「当代の賢侯第一」と評された。

改革は主に制度の硬直化や、藩財政の悪化を解消するために行われた。家老を実務から外し年寄（執政職）に人材を抜擢するなどの職制改革、武芸師範を採用し藩士の武術を奨励するといった軍制改革など、次々と行った。

正徳2年（1712年）から、年貢の確保、^{こおりがた}郡方支配機構の合理化を目的に、有力農民を郡政に組み込むほか、年貢率を固定するなどの郡制改革（正徳新格）を行ったが、農民の不満が高まり、享保3年（1718年）に大きな一揆が起きた。

正徳新格はほとんど全面的に撤回することとなったが、その後も役所を予算制とする^{うけじょうぎん}請定銀の制を全役所に採用したほか、社倉の検討、学問所の設立など、精力的な政治を行った。

また、吉長は現在の家禄や領国を継承し、それを子孫に伝えるためには、国の根元や先祖の由緒を知る必要があると、先人や先祖の事跡を調査・収集したという。

8代 (6代藩主) 浅野宗恒

享保2年(1717年)～天明7年(1787年)

広島藩主在位期間：宝暦2年(1752年)～宝暦13年(1763年)

吉長の病没にともない襲封。約11年と短い治世の中で、財政緊縮を柱とした宝暦改革を断行し、藩債整理に成功をおさめた。

襲封当時、享保17年(1732年)に起きた大凶作などにより藩財政は極度に悪化していた。そのため宗恒は、御用達所や勘定方、郡方を中心に重点強化し、その上で政務の簡素化や諸役所の経費節減、家中経済の引き締め策を推進した。

また、吉凶行事や進物・贈答の禁止をはじめ、諸事省略を強制した上で、宝暦4年(1754年)から7年間、二ツ五歩(25%)のあげまい上米(藩主が家臣に対して課した献上米)を申しつけ、事実上の減俸を行った。さらに、享保20年(1735年)から続けていた永代禄制(禄を家付きにし、世代による増減を無くしたもの)を廃止し、本人の勤怠によって家禄の増減を行うなど、7カ年計画の徹底した緊縮政策を実施した。

その上で、大坂商人との藩債返還交渉をはじめ、宝暦8年(1758年)には「御除銀」(使途のない貯え銀)の制を復活させ、宝暦9年(1759年)には大坂商人から新規借銀を申し込んで欲しいと要請されるほど、債務整理に見通しが立った。

しげあきら

9代 (7代藩主) 浅野重晟

寛保3年(1743年)～文化10年(1813年)

広島藩主在位期間：宝暦13年(1763年)～寛政11年(1799年)

父・宗恒の隠居により、20歳で襲封。宗恒の後見のもとに宝暦改革を継承し、徹底した緊縮政策を励行した。

その治世は36年間と長く、その間、10万石以上の損害が出た災害が頻発し、さらに幕府公役の負担により、臨時の支出が膨大であった。

幕府では老中・田沼意次おきつぐを中心に放漫な財政策が行われていたが、広島藩では対照的に緊縮政策を推進、重晟自身も徹底して質素節儉の生活を送り、藩士に模範を示していたという。

一方、積極的な国産自給化政策も行い、他国米・他国酒の領内移入を厳禁するとともに他国商人の他国商品販売を禁じるなど商業統制策を実施した。その上で領内に元々ある国産を把握し、その生産性向上と技術改良を指示、新しい国産の育成を奨励した。

そのほか、災害・凶作に備えて困糶の充実を図るほか、祖父・吉長の頃に実現できなかった社倉設立を推進。また学問所を城内に創設するなど、多方面にわたって特徴的な政策を展開していった。

歴代藩主の中でも書画に秀で、花鳥画に優れた作品を残している。

なりかた 10代 (8代藩主) 浅野齐賢

安永2年(1773年)～文政13年(1830年)

広島藩主在位期間：寛政11年(1799年)～文政13年(1830年)

齐賢の頃は、重晟の頃に引き続き、最も歳入・歳出の均衡がとれた安定期にあたるといわれる。

治世は31年間に及ぶが、そのうち前期にあたる文化初年頃までは、重晟の路線を継承して徹底した緊縮財政策をとり、文化8年(1811年)には12万両の「御除金」^{およけきん}を備蓄した。

文化7年(1810年)に年寄上座に就任した関蔵人^{くらんど}と、関に抜擢されて勘定奉行頭取・郡奉行となった筒井極人^{きわめ}により、積極的な国益政策(国産品開発と領外販売)が推進された。しかし、国益政策の推進に対しては藩役人、儒者の中に異論や反対勢力も見られ、推進体制は必ずしも一致していたわけではなかった。そのため齐賢の死後、天保の大凶作(1833～38年)の到来などにより、政策の急激な急回が行われる。

一方、藩校をはじめとする文教政策はこの頃全盛期を迎えた。家老が独自の教育施設を設立し、領内で私学・家塾も盛んになり、文政8年(1825年)には「芸藩通志」が編纂されるなど、藩の教学振興策は、藩内全体の文教の発達に大きな役割を果たした。

11代 (9代藩主) 浅野齐肃

文化14年(1817年)～慶応4年(1868年)

広島藩主在位期間：天保2年(1831年)～安政5年(1858年)

齐賢の病没により、14歳で襲封した。

幕府公役の負担と天保の大凶作、また、天保4年(1833年)

将軍家・末姫すえひめとの婚儀や天保6年(1835年)の二葉山御社(饒津神社)造営など、臨時の出費が続き、藩財政は極度の窮乏に陥った。このような状況に対し、執政職・今中相親すけちからを中心に、六会法の実施や、藩札の濫発・切り下げなどを行うが、いずれも商業・金融重視の政策で、状況はさらに悪化する。

嘉永6年(1853年)6月、ペリー来航を機に、今中らに対する不満が噴出し、辻将曹しょうそうなど改革派が台頭。同じく財政の窮乏を憂う家老・浅野遠江忠助とおとうみただすけ(三原浅野家)と連絡をとり、同年11月に浅野豊後道興もんどやすさだ(東城浅野家)、上田主水安節の三家老が、連名での建白書を提出し、今中相親などの左遷を求めた。しかし、その後も海防や軍事力の強化は十分に進まなかった。

齐肃は生来多病で、日頃から眩暈などに悩まされていたため、41歳で退隠した。

よしてる

12代 (10代藩主) 浅野慶熾

天保7年(1836年)～安政5年(1858年)

広島藩主在位期間：安政5年(1858年)～安政5年(1858年)

藩内外の情勢が緊迫する中、22歳で襲封。

幼い頃から聡明で、薩摩藩主・島津斉彬なりあきらの教導を受け、土佐藩主・山内容堂ようどう、越前福井藩主・松平春嶽しゅんがくなど、一橋派大名(幕府将軍13代家定の跡継ぎを巡り、一橋慶喜を推す党派)との交流があった。

英明な若公として、藩内外の改革派や領民に襲封が期待されていたが、襲封4か月後から頭痛、腹痛、高熱などを併発して重態となり、藩の側医師、幕府の医師などの診療の甲斐なく病没した。藩主在位期間はわずか6か月であった。

13代 (11代藩主) 浅野長訓

文化9年(1812年)～明治5年(1872年)

広島藩主在位期間：安政5年(1858年)～明治2年(1869年)

慶熾の急死により、青山内証分家から襲封。実情把握が第一と考え、文久元年(1861年)6月から10月にかけて領内をくまなく巡見し、実態把握に努めるとともに、辻将曹などの改革派を登用し、藩政改革に乗り出した。

殖産興業政策も強力に推進し、領内の生産物を大坂へ搬出するとともに、合法・非合法的に開港場を通して海外にも輸出。外国からの武器・艦船などの輸入代金として海外正貨の獲得に努めた(芸薩交易)。

また、軍制の洋式化にも力を入れ、大砲の鑄造や小銃の製造も行うほか、農民に洋式訓練を行い、農兵を編成する。やがてこれらの中から、戊辰戦争に出征する応変隊、神機隊が編成される。

揺れ動く中央の政局にも対応が求められ、長州征伐の際には、幕府と長州との間を周旋しゅうせん(間に入って取り持つこと)、幕府と長州藩の和平成立に尽力した。

その後、薩長同盟が成立し、広島藩も討幕の盟約に参加する(薩長芸三藩盟約)が、一方では土佐藩とも同調し、大政奉還の建白書を提出している。

この間の心労からか、慶応4年(1868年)5月に体調を崩し、長勲に藩政を委任。明治2年(1869年)1月に退隠する。

14代 (12代藩主) 浅野長勲

天保13年(1842年)～昭和12年(1937年)

広島藩主在位期間：明治2年(1869年)～明治4年(1871年)

幕末の政局多難の中、嗣子(跡継ぎ)として長訓を補佐した。

特に小御所会議では議定として出席し、薩長と土佐藩の対立を調停し、会議をまとめ、その後の新政府の基本を確立させた。

明治2年(1869年)2月、長訓の退隠により藩主となるが、版籍奉還を申し立て、6月に許可され、広島藩知事となる。

藩政の改革を行い、新体制づくりを進めていたが、明治4年(1871年)7月に廃藩となり、藩知事を辞職し、東京に移る。

その後は明治政府下にあって、元老院議員、イタリー公使を務めるほか、士族授産、社会教育にも積極的だった。

特に、第2代駐イタリー公使を務めたのち、欧米を視察し、社会教育の重要性を痛感したことは、大正2年(1913年)の観古館、大正15年(1926年)の浅野図書館(広島市立中央図書館の前身)の開館につながる。

明治36年(1903年)財団法人芸備協会を設立し、広島県出身学生の東京遊学に資金と宿舎を提供する。後に長勲が総裁となる。

昭和12年(1937年)に96歳で死去。昭和まで生きた大名経験者として知られる。

展示パネル（浅野家歴代紹介）の主な参考文献

1 全体

- ・『新修広島市史（全7巻）』広島市／編 広島市役所 1958～62年
- ・『芸藩輯要 復刻版』林 保登／編 芸備風土研究会 1970年
- ・『広島県史（全28冊）』広島県／編 広島県 1972～84年
- ・『広島市史（全6巻）』広島市／編 名著出版 1972年
- ・『広島県大百科事典（全2巻）』中国新聞社広島県大百科事典刊行委員会事務局／編 中国新聞社 1982年
- ・『三百藩藩主人名事典 4』藩主人名事典編纂委員会／編 新人物往来社 1986年
- ・『広島城四百年』中国新聞社／編 第一法規出版 1990年
- ・『藩史大事典 第6巻 中国・四国編』木村 礎／編, 藤野 保／編, 村上 直／編 雄山閣 2015年
- ・『広島藩』土井 作治／著 吉川弘文館 2015年

2 初代長政～第3代長晟

- ・『大日本史料 第12編 11』東京大学史料編纂所／編 東京帝国大学文科大学史料編纂掛 1908年
- ・『浅野荘と浅野氏』浅野史蹟顕彰会〔編〕 浅野史蹟顕彰会百年記念祭事務所 1917年
- ・『浅野長晟公略伝』三井 大作／著 浅野長晟公広島入城三百年記念祭事務所 1920年
- ・『芸備之友 第11巻第115輯』東京芸備社／〔編〕 東京芸備社 1920年
- ・『浅野史蹟輯録』森 徳一郎／編 浅野史蹟顕彰会 1941年
- ・『和歌山市史 第2巻』和歌山市史編纂委員会／編 和歌山市 1989年
- ・『旧広島藩主浅野長晟の墓』高木 正実〔調査〕 出版者不明 19—年
- ・『浅野長政とその時代』黒田 和子／著 校倉書房 2000年
- ・『ひろしま人物伝』落合 功／編著 溪水社 2002年
- ・『戦国武将と高野山奥之院 石塔の銘文を読む』木下 浩良／著 朱鷺書房 2014年
- ・『石田三成伝』中野 等／著 吉川弘文館 2017年
- ・『浅野家がたどった城』広島城／編 広島城 2019年

3 第4代光晟～第6代綱長

- ・『芸州新山記』中尾 壮一／著 中尾壮一 1980年
- ・『菩提寺の庭』渡辺 健／著 渡辺健 1997年
- ・『芸州と忠臣蔵』渡辺 健／著 渡辺健 2002年

- ・『赤穂事件と広島』広島城／編 広島市市民局 2006年
- ・『満姫』野村 昭子／著 北國新聞社 2013年
- ・『広島藩士三好家文書展』広島県立文書館／編 広島県立文書館 2015年

4 第7代吉長～第10代齊賢

- ・『人づくり風土記 34』加藤 秀俊／〔ほか〕編 農山漁村文化協会 1991年
- ・『國泰寺寺史』前田 智／ほか編 野間英明 2018年

5 第11代齊肅～第14代長勲

- ・『坤山公八十八年事蹟』乾・坤 小鷹狩 元凱／編 林保登 1932年
- ・『大崎町史』大崎町史編修委員会／編 大崎町 1981年
- ・『昭和まで生きた最後の大名浅野長勲』江宮 隆之／著 グラフ社 2008年
- ・『幕末の動乱と瀬戸内海』広島県立歴史博物館／編 広島県立歴史博物館 2010年
- ・『激動の時代 幕末維新の広島と古文書』広島県立文書館／編 広島県立文書館 2011年
- ・『お殿様、外交官になる』熊田 忠雄／〔著〕 祥伝社 2017年
- ・『戊辰戦争と広島』広島城／編 広島城 2018年